BOULOGNE IS THERE

あれはブローニュの森

笹沢左保

BOULOGNE IS THERE

あれはブローニュの森

笹沢左保

あれはブローニュの森

一九八八年七月二五日　第一刷発行

定価　一二〇〇円
著者　笹沢左保
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一―五〇
出版部（〇三）二三〇―六一〇〇
電話　販売部（〇三）二三〇―六三九三
製作課（〇三）二三〇―六〇八〇
印刷所　中央精版印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

© 1988 S. SASAZAWA, Printed in Japan
ISBN4-08-775119-8 C0093

◉あれはブローニュの森

目次

第一章　年齢差三十八歳　5
第二章　火山の島に　81

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章　過去が長い　158
第四章　パリに涙を　235

装幀　三村　淳

第一章　年齢差三十八歳

1

成田の新東京国際空港のターミナル・ビル内は、全体的に活気を失っているように感じられた。いつものような雑踏が、いまは見られない。大量の豆を流して作る波の音、あの擬音に似た人声の騒がしさも、鳴りをひそめている。

静寂とまではいかないが、音と声のボリウムが低いのだ。終電車が出た直後の郊外の駅前に似た雰囲気、とでもいったらいいのだろうか。

そのせいか、巨大な空間に虚ろさがあった。もっとも、決して不快な空虚さではなかった。年老いた人間たちは、何となく気だるい旅というものを、感じ取るに違いない。もし、そこに若者たちの別離があるならば、より感傷的にさせられるだろう。

そうした夜の空港は、遠い旅路への出発点として似つかわしい。浮かれた気分でただ賑やかに、時間をつぶしている旅行者はいなかった。

搭乗時間を待つ人々は、自然に口数が少なくなる。それぞれの胸のうちにどのような思いがあるのか、考え込んでいる目つきの顔が多かった。

黒皮のコートを着て、サングラスをかけた中年男もそうだった。自分から連れの女に、話しかけるということが一度もない。淡いグリーンのレンズの奥で、男は眠そうに目を細めている。

女のほうも、あまり口をきかなかった。だが、それは彼女が、無口だからではない。また、もの思いに耽るといったポーズなど、捜しようもなかった。

女はマンガ雑誌に、熱中しているのである。

その男女は、北ウィングの鮨屋にいた。握り鮨を二人前と、それに男は日本酒を注文した。鮨が食べたいと、この店に誘ったのは女のほうであった。

鮨屋も、今夜はすいていた。それで安心してのことか、女はついさっきまでよく喋っていた。しかし、握り鮨が目の前に置かれたとたんに、なぜか女は持参のマンガ雑誌を開いたのだった。

それから女はずっと、熱心にマンガ雑誌のページを繰っている。ときどきエヘッとか、ウフッとか笑い声を洩らす。そういう女を一向に咎めることなく、男は黙々と盃を口に運んでいた。

父と娘であれば当然、知らん顔ではいないだろう。こんなところでマンガなんて読むんじゃない、早く鮨を食べなさい、と注意しないではいられない。

それなのに男は、まるで無関心でいる。よそよそしいというのではなく、また女に遠慮しているわ

けでもない。男は他人事として、女の領域を守ってやっている。一種の冷淡さかもしれなかった。
それで端の者は、奇異な印象を受ける。誰の目にも父と娘としか、見えない男女だからである。父と娘のあいだに一線を画すように、ひと筋の川が流れているのが不思議に感じられるのだ。
他人はすべて、外見から察しをつける。外見となれば、年齢の差しかない。親子ほど、年が離れている。それだけのことを根拠に、他人は父と娘だと決めてかかる。推察ではなく、断定であった。
だが、この男と女は、父娘ではなかった。パスポートの名前の姓も、完全に違っている。男は小利根志郎であり、女は花村絵美子だった。
「さあ、あとはお楽しみってことにしておこう」
女はそう言って、マンガ雑誌を閉じた。
「うん」
生返事で応じて、男は盃に酒を注いだ。
独酌で飲み続けた酒は、もう三本目の銚子を空にしていた。
「退屈した?」
女は男に、笑いかけた。
「いや……」
仕方なさそうに、男も笑顔を作った。
「でも、成田の空港って、いつもこんなにすいてないでしょ」
いきなり、女は話題を変える。

「うん」
男のほうは、またしても生返事であった。
「わたし見送りや出迎えに、何回も来たことがあるんだけど、いつだって列車が遅れたときの駅の待合室みたいに、ごった返していたもの」
「そうだね」
「ねえ、どうしてなの」
「時期のせいだろう」
「時期って……」
「シーズンオフってことだ」
「だって、十二月よ」
「十二月でも、休日には関係ない時期だ」
「今日は、十二月十日でしょ」
「一種のエア・ポケットみたいなシーズンオフ、同じ十二月でも二十日をすぎたら一変してものすごい混雑となる」
「海外脱出組が、ドッと押し寄せるのね。いまが逆に、いちばんガラガラの時期っていうわけか」
「国内、国外の別を問わず、日本人が一般的な旅行を控える時期だろう」
「用事がある人は、別としてでしょ」
「だから、いまのこの成田の空港は、嵐の前の静けさを迎えているってことになるんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そんなときに海外旅行に出かけるんだから、わたしたちって優雅ね。とっても、優雅だわ」
女は、嬉しそうに笑った。
淡く紅を塗った唇が、花弁のように形よく綻んだ。真っ白な肌よりも、更に白く輝くような歯がのぞいた。最近ではある意味で、平凡といわれそうな顔立ちだが、女の容貌は美しかった。
大きな目が、笑ってもあまり細まらない。白目に濁りはなく、潤んだような黒目が動くとキラキラ光る。円らな瞳——と、やや古い表現を用いたくなる。
鼻は先のほうが、ちょこんと高くなっている。鼻筋が通っているというべきなのだろうが、ちんまりしていて可愛らしい鼻だった。エクボが両頬に、小さな翳りを作っている。
面長ではないが、丸顔でもない。顔の輪郭がふっくらとしていて、女の美貌をあどけなくしている。少女の面影が、そっくり残っているようである。
そのせいか、『美少女』という言葉を連想させる。それも冷たいほどに、目鼻立ちの整った美少女というのではない。愛嬌があって、どことなく三枚目的な可愛い美少女なのだ。
ただし、チャーミングな女という讃辞は、花村絵美子にまったく当てはまらなかった。野暮ったいとまではいかないが、アカ抜けしていないことは間違いない。
まだ洗練されていないといえるかもしれないが、花村絵美子には本質的に魅惑性が欠けているようにも思える。当然、女の色気といったものは感じられない。
その代わりに、特に指摘すべき魅力も二点ばかりある。
ひとつは彼女が美人であることを、まるで意識していない点であった。自分が美しいことに気づい

てはいるだろうが、それをあまり問題にしていないというべきだろう。
もちろん気どってはいないし、取り澄ましてもいなかった。自分の容貌に限ってだが、他人がどのように見るかということは、花村絵美子の念頭にほとんど置かれてないようだった。
もうひとつの魅力は、清潔感である。どこがどうとはいえないが、近ごろでは貴重ともいえそうな若い女の清潔感が、花村絵美子の全身を包んでいる。
着ているものとか、香料とか化粧とかによって、作られたものではなかった。また色が白い、肌が滑らか、毛深くない、きれい好き、といった言葉で表わす条件とも無関係であった。
全体的な印象として、若木のように清潔だと思わせる。早朝の澄みきった空気を、発散しているように感じられる。健康的な自然の透明感だった。
「早くお鮨を、食べちゃいなさい」
男は、ニコリともしなかった。
「もう、いいわ」
目の前の握り鮨を、花村絵美子は見やった。
マグロとタマゴの握りが、ひとつずつ減っているだけであった。
「本場のお鮨を、食べておきたいって言ったのは、きみなんだよ」
男は時計に、目を落とした。
「パリでも、食べられるんでしょ」
花村絵美子は、コートに手を伸ばした。

「うん」
最後の一杯の日本酒を、小利根志郎は飲み干した。
もうこれ以上、鮨を食べるようにすすめはしない、という男の顔だった。どうしても、食べさせたいとは思わない。どうでも、いいことなのである。
「先生だって、残している」
大発見をしたような目になって、花村絵美子は男の前の鮨を指さした。
「ひとつだけじゃないか」
相手にならずに、男は立ち上がった。
花村絵美子は、男のことを『先生』と呼んだ。『先生』と呼ばれる職業は、特定されていない。教師、医師、弁護士、作家、政治家、評論家、美容師、マッサージ師、演出家、税理士と、どれも『先生』なのだ。
だが、小利根志郎の場合は『先生』と呼ばれるのに、およそふさわしくない職業であった。小利根志郎の職業は、あえていえば会社役員ということになる。
それなのに花村絵美子は小利根志郎のことを、知り合ったときから『先生』と呼んでいるのである。小利根はそれを、強いてやめさせようとはしなかった。名前の代わりだと思えば、それでよかったのだ。
鮨屋を出た。
男はアタッシェ・ケース、女はマンガ雑誌とバッグ。二人の手荷物は、それだけであった。チェッ

クインは、とっくにすませてある。二人のトランクはすでに、搭乗機の貨物室に収納されているはずだった。

「さあ、いまからわたしは、先生の奥さんよ」

花村絵美子は、男の左腕をかかえ込んだ。

小利根志郎は、それを拒まなかった。好きなようにさせておくと、小利根志郎は構わずにいる。花村絵美子は、男に身体を押しつけるようにして歩いた。

そうしていても、やはり父と娘であった。娘が甘えるように父親の腕をかかえて、寄り添って歩く姿は、誰が見てもおかしいものではない。

小利根志郎は四十七、八だろうと、よく言われる。若く見せようと努めているつもりはないが、小利根志郎の外見にはある種の華やかさが認められる。

たとえば服装だが、四季を通じて白いスーツしか着なかった。ワイシャツは、ブルーかピンクと決まっている。ネクタイだけは、意識的に地味なものを選ぶ。

いまも小利根志郎は、白いスーツを着ている。ワイシャツはブルー、ネクタイは紺色の無地だった。白といってももちろん冬物で、ウール・ピケのスーツである。

しかし、冬に白いスーツを着る日本人の男は、まだあまり多くなかった。だから、目立つことになる。目立つのは、派手さのためであった。

派手さは若く感じさせることに、効果的といえるだろう。そういう意味では、婦人用語の『若作り』に該当する。それに、髪の毛を短く刈り込んでいることも、小利根の見てくれを若くしていた。

更に、目のまわりに判然と表われる年齢を、小利根志郎はサングラスで隠している。元来が年をとらない容貌であり、色白であることも小利根を老けさせなかった。

そのうえ、姿勢がよかった。小利根志郎はいまだに、下着に属するシャツというものを、真冬だろうと用いたことがない。寒がりではないのだ。

二十ごろまで武道で身体を鍛え抜いたことも、いまに影響しているのだろう。小利根の黒いコートは仔牛の皮で、襟が毛皮になっている。だが、その下に着ているものは、スーツとワイシャツのみであった。当然のことだが、ズボン下もはいていない。

それで小利根志郎の背筋は、ピンと伸びている。一メートル七十センチでは、もう長身ということにはならない。しかし、姿勢がいいために、実際より背が高く見える。

同時に小利根のルックスを、若々しくさせているのだった。四十七、八で、通らないことはなかった。

一方の花村絵美子はスーツ、ストッキング、靴、バッグと黒ずくめで、ブラウスとコートが白であった。美容院へ行かない髪はセミロングで、流れるように黒い光沢を放っている。

小柄な肢体だがヒールがかなり高いので、小利根志郎と極端に釣り合いのとれない身長ではなかった。胸や尻のふくらみは、特に豊かではない。だが、タイトのスカートが浮かび上がらせているのは、明らかに女の肉付きと曲線である。

そこだけに注目すれば肉感的には違いないが、成熟度というものをマイナスしなければならなかった。しかも、あどけなさが残っている顔には、淡い口紅を除いて化粧っ気がない。

それでも花村絵美子は二十歳ぐらいの女だと、誰の目にも映ずるはずだった。男が四十八で女が二十だとすれば、父親が二十八のときに生まれた娘ということになる。父娘として当たり前だと、うなずける年の差であった。

しかし、小利根志郎は三ヵ月前の誕生日で、五十六歳になっていた。

花村絵美子は、私立高校の三年生で十八歳だった。

遅くなって生まれた子どもであれば、三十八違いの父娘というのは珍しくない。だが、小利根志郎と花村絵美子にいっさいの血縁関係はなく、ただ年齢差が三十八という男と女なのである。

2

サテライトで、搭乗案内のアナウンスを待つ。周囲には、納得がいくといった人数の乗客たちが、どことなく沈んだ姿を見せている。笑い声の聞こえない静けさに、搭乗直前の混雑と喧噪(けんそう)が懐かしくなる。

搭乗案内が、やがて始まった。

二十一時三十分発の日本航空四一三便、スペインのマドリード行きであった。マドリードへの直行便は、便数が少なかった。そのせいだろうが、いくら海外旅行が時季はずれとはいえ、かなりの乗客の数である。

最後のほうになって、小利根志郎と花村絵美子は機内にはいった。ファースト・クラスだからだっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com